書　評

Harold E. Fey, The Lord's Supper : Seven Meanings
Harper &. Brothers, New York, 1948, 117 pp.

著者は多彩な経歴の持主である。デサイプル派の教職，マニラの神学校教授，雑誌の編集者 (World Call 及び Fellowship)，1940年来クリスチャン・センチュリー誌のスタックの一員というが，1948年以降のことは筆者には不明。この間，第一次大戦には軍人として参加したが，後には平和主義者となり，その方面の著述もある由。本書は題名の如く，聖餐の意味を問うて今日の教会に訴えるデボーショナルな研究である。

第一章「魂の言語」は本書の序論に当る。聖餐は，御言葉と共に，礼拝における魂の言葉 (language) を構成する。聖餐記事には色々問題が残されるが，そのことは聖餐の意味の核心を不確かにするものではない。イエスはユダヤの宗教教育の慣例により，簡単に想起しうる「たとえ」(acted parable) によって教えた。それはいわば弟子達との関係を綜括するもの，又十字架をとく鍵であった。初代教会が会堂も職制も，又公同性すらも明らかにしえなかった時に，崩れかかった世界を一つにし，新たな文明の基をおいていった。その力は全く聖餐に秘められ，そこからの賜物であった。今日のキリスト教界の内側の弱さの大きな原因の一つは，聖餐の不毛と無関係ではない。

第二章「聖餐の名称」　土地と時代の相異により，聖餐は種々の名称で呼ばれてきた。それらの由来は，その吟蓄する意味の豊かさを明らかにする。①〔主の晩餐〕主との生ける交わりを単適に表す。②〔ユーカリスト～感謝〕聖餐が愛餐と一つであった時，主の祝福を願って始った食事。③〔(Holy) Communion〕主との一致，又首における一致が祝れた。以下，④ The Divine Liturgy, ⑤ ミサ, ⑥ The Oblation or The Present, ⑦ Consecration, ⑧ Agape, ⑨ Eulogis, ⑩ Synaxis 他。

第三章「七つの意味」　以下の各章に論じる聖餐の意味七つを一括して展望する。(1)キリストの記念，②感謝，③契約，④確認と更新，⑤霊の糧，⑥和解(贖罪)，⑦不死。

第四章「私を記念して」　宗教改革は，ルターによる福音の再発見が全てではない。ツウイングリが1525年，チューリッヒで行った第一回の福音主義聖餐礼拝は，中世紀のミサから，単純に聖書のキリストを更新する重大な第一歩であった。では，その「記念」の内容は何か。著者はヨハネ伝13～18章を，ギリシヤ的影響下の教会が，最後の晩餐の時にうけたものとして記している，とする。パウロと福音書の，簡単な「これは私の肉である…」というシムボルこそ，弟子達の想起のチャンネルとなっていったが…。イエスの記念，とは人となり十字架に至る迄ご自分を与えられ，又今も生きて交わりの中に働き給う神の子イエスを求め，崇めることである。

第五章「神への感謝」　ローマ教会はミサ中の犠牲の契機を強調しすぎて，逆に宗教改

革は個人への賜物を重視する余り，聖餐の感謝の意味を薄くした。しかし，そこにこそ中心はおかるべきである。その根本は贖いの事実の確かさを感謝し讃美する，共同の行為である。それは「教会生活のデボーショナル・センター」(E. Underhill) とさえいわれている。個人の感謝もこの歓喜に溢れた祝福との正しい関係におかれねばならない。

第六章「契約の血」　ここではキリストにおける契約の意味が採られる。まずそれは，交わりこそがキリストの内的現在 (inner present) をもつということである。即ち，弟子達との集合性 (Collectivity)，又体としての教会での主の現在である。契約は更に，赦しの確かさ，新しい力の約束，そして新に人を造り変える保証である。しかし契約の概念に見落されてきた第三は，主は新しい秩序の基をおく方であり，人は恵みとみ力に支えられて，この世に委託をもつ，とする点である。

第七章「あなた方のためにさかれた」　ここでは聖餐の含む犠牲の意味が問われる。ローマ教会はそれを神の怒りの宥和の為とし，ミサの度にカルバリの光景を奇怪な市場取引とする。それは神ご自身の性質とはからいによる，それに価せぬ罪人への恵みなのであった。その様に，生けるキリストの現在が，殊に教会に与えられたしるしにあづかる時に証される。

第八章「これは私の体である」　パンはキリストの体を象徴する。が又それは弟子達の一致を表す。即ち主の御体に与る時，信仰者は既に教会の本質的一致を宣言しており，それは又他者との和解の道をも示している。ローマ教会，プロテスタント教会は共にこの点で聖餐理解に誤りがあった。聖餐はまず，キリストと教会間のものである。それを単に教派の内の事とする必要はない。そこにおいてこそ基督教社会の喜ばしき一致がある。その点，クローズド・コミュニオンは慎重を要し，又使徒継承にも問題がある。聖餐行為自体，一致と赦しの求め，又悔改めの宣言であった。

第九章「誰によって我らは和解せしめられるか」　聖餐で祝われるキリストの現在は，恵みによる神との和解が成立し又継続しているという信仰によって証される。本章ではその「和解」が贖罪論の問題として扱われる。まずグロティウスの統治説は，イエスの死を法の尊厳を満たすものとするが，しかし本来，只の法支配でなく，愛のそれが，又神の主権もその父性が重要であると批判する。次にアンセルムスの満足説が問われる。神人であるイエスのみが神の要求を満たし得，且つ自発的な受苦によって彼は功績の貯蔵をもち，聖餐の度にそれは増される——この見解はローマ的教理の基礎，ことに教権主義の防波堤となっていく。カルヴァンの贖罪説も本質的には同様と見做される。そこでも神の主権の一義的性格は神の義であり，聖餐においても神の宥和による罪の償いが語られ，即ち，神の満足が祝われるからである。しかし新約の聖餐の見解にはグロテスクな迷信にも発展する(ニッサのグレゴリウス，ペトウルス・ロンバルズ)宥和，慰撫，補償等の概念はどこにもない，という。以上の代表的贖罪論に対して，初代教会の聖餐の中心にある喜びにあふれた感謝に最も相応しいのは所謂，道徳(感化)説とされる。それは神の法を道徳的基盤に見，神の父性にも，又イエスの教えと行為にもよく合致する，と。更に現代のモバリー，リチュル等の贖罪説の集合性・社会性契機が評価される。結論的に「『神はキリストにお

いて世をご自分と和解させた』という信仰以上の意味を，どんな贖罪論も与えない。この信仰こそ，我々と我々の時代に相応しい」(79頁)。

第十章「彼の来られる時迄」　人格性の不死としての永遠の生命が弁証される。しかしそれ丈ではその希望は理論的可能性に止まっている。それは，復活であり，生命であるキリストの生ける現実に立つ時に確証される。即ち，信仰を通して，聖餐に預る事にある。次に，聖餐の要素(パンとブドー酒)に関して，「私は生命のパンである……私の肉をたべ，私の血をのむ者には永遠の生命がある…」(ヨハネ6：47～59)が実体変化説を支えるとする見解があるが，本来その意味はない。弟子達はこの御言葉から，彼らの中に立ち給うイエスを想起したのであり，今日に於ても事情は同じである。それは，食肉の祭 (Cannibal feast) への招きではない。第3に，主を信ずる者の交わりの中にキリストの現在はある。即ち，パンとブドー酒のシムボルは只イエスの人格的体を表すのみでなく，その霊的な体一教会を象徴する。教会自身の継続が彼の生き続ける永遠の証であり，又そこに我らの永生の保証がある。

第十一章「実体変化説」，「パンとブドー酒は霊的現実のフィジカルなシンボルである」この著者の見解と対比させて，本章では綜括的に実体変化説がとり上げられ，その誤りが指摘される (C. J. Cadoux の所論が援用される)。ことに9世紀に始まるその教義の生成過程，いわば聖餐論史がかなり詳細にのべられていて，大変興味深い。ラドベルトウスの所論が，ローマ教権の拡張と共に，又それに寄与する力となって次第に反対論を封じていくのだが，著者はその原因を次の様に記している。①当時の文化が極めて低く，教職のレベルも低かった。②ベネディクトウス派の組織，アウグスティヌス的伝統をひく人々が重要な地位を追われ，権力追従的な者がこれに代って迎えられた。③ローマ教会の司教がこの見解をその権力拡張に利用した。そして更に④王侯達がその様な拡大する教権を政治的安寧の為に利用した。

第十二章「一つのパン――一つの体」　終の章では1940年に始まった世界聖餐日の意義がとかれる。それこそ基督教社会の連帯性を強め深め，聖霊の豊かな実を結実させる方向である。我らの分離と無力にも拘らず「我らのキリストにある一致は渇望への課題ではなく，経験される事実である」(1937年 W. C. C. のメッセージ)。

以下，二，三気づいた点。本書は聖餐の基本的な意味をやさしく解明しようという，実践的な意図に貫かれている。章の初めに優れた引用の奨めも用意される。その点極めて健実な研究であるが，そのことは又細かい個々の点には問題と限界を残しているともいえる。

1.　その立場は正確には象徴説である。勿論，信仰の受領によるキリストの現在を象徴するということになるが，その客観性の側の解明が必ずしも充分とはいえない。ルターの共在説等への言及もほしかった。

2.　九章の贖罪論に関して，道徳説に傾くその意図は解るが，ここでも贖罪の客観性が稀薄であり，論理の不整合を残す。悪・罪・死の力の克服は矢張りアウレン等の説く様にパウロ的古典的贖罪理解にまつのではないか。著者の思想は類型的にはヨハネのそれであ

ろう。パウロの義の理解が顧慮されていない。

3.　七つの意味の分け方は，何れも重要にしても技巧的な点もあり，重複の感もある。

4.　聖餐には全き感謝のしるしとしての我々自身の献身 (Oblation) がもっと強く打ち出される必要はないのか。D. M. Baillie 等はそれを明らかにしている (Theology of the Sacrament)。

5.　しかし，聖餐に霊的な豊かな理解を教えられる点，教会論との深いつながり，しかも閉鎖的でなく，そこにおける教会一致の現実の経験的事実を示す点，これらにおいて本書は非常にすぐれているといえる。筆者は改めて教団の将来と現在について考えさせられた。

（寺崎　暹）

J. E. L. Oulton, Holy Communion and Holy Spirit,
London S. P. C. K. 1954, 203 pp.

著者はアイルランドの首都ダブリンのツリニティカレッヂの神学教授であり，また教会でも要職をつとめている人である。この書が世に出される理由として著者は「聖餐と聖霊についての神学的労作は多くの教義的労作の中に散見できるけれども，“聖餐と聖霊”という標題のもとで一巻をまとめているものはほとんど皆無にひとしいので，このような事情を考慮し，要求にこたえたいと考えてこの書を出す」と述べている。しかし，著者の意図するところは論争的に「聖餐と聖霊」の問題をとりあげるのではなくて，新約聖書及び初代教会の中にあらわれている礼典の諸問題を提示しつつ，さらに初代教父たちの思想をも検討し，これらの資料によって「聖餐」についての多種多様の考えかたの根本にあるものを探ろうとするところにある。このような著者の意図が目標とするものはいまのわれわれの中にある聖餐に関する不一致の現状に対して，どこに究極的な一致点があるかを探る関心をたかめたいということにあるようである。さらに著者は，この著作のあとに多くの意見や労作が生まれることを期待している。結論的に言えば，公平な考えかた，穏健な思考を旨とし，できるだけ多くの資料に当りながら，著作の目的を達しようとしているといえよう。以上のような意図から，この本は鋭い神学的論争の視点に特別の興味を持つ者には多少のたいくつさを与えるかも知れないが，聖餐の問題について着実な検討を加えたいと願う者には貴重な労作であると言わねばならない。

この書は次の九章より成る。すなわち，第1章，アパールーム（イエスとその弟子たちが最後の食事をした部屋）の交わり。第2章，聖餐の制度について。第3章，使徒たちの働き。第4章，パウロの手紙。第5章，ヨハネ文書。第6章，ヘブル人への手紙。第7章，新約聖書証言の展開。第8章，洗礼と聖餐。第9章，神の光の中にわれわれが見る光，となっている。

以上でわかれるように，この著作の大部分は新約聖書神学の領域にあるといえる。第1章ではあの二階座敷に集って共に食事をしたイエスとその弟子たちとの間に結ばれた交わりが，いかに最後の晩餐と深い関係にあったかを論じている。最後の晩餐の記事は制度化された聖餐式の反映というよりは，捕囚以後の時代からユダヤ人の間で持たれるようにな